

# 過去に於ける大會童話

河 合 孝 雅

童話といふものは、そもく爐邊から發達したもので、お爺さんやお婆さんたちが赤くもえる爐の火をかこみながら「昔々、お爺さんとお婆さんがあつたミサ」ミシんみりミ自分の孫達に話した、所謂爐邊ばなしがそのはじめである。

この爐邊の話はさらに道端の話に進化し、子供達は村の話術家からすゞしい夏の木蔭や、あたゝかい冬の日のひまつぶしにお話をきくこゝになつた。村のお話上手がさらにまた旅をする話に變化し、一村から一國へ、一國から他國へミその話術をおしひろめて行つた。

文字が發達した後もおはなしを愛好する人間の本能は決して話術を不必要ミはしなかつた。徳川末期から明治時代に講談ミ落語ミの發達を見、多數の名人が輩出し、一般人の娛樂ミ教養の上に貢獻したるこゝ莫大なるものあるはこれを物語るものである。それらは成人にミつても子供にミつても喜ばれたが、兒童心理の上に立脚したものではない故に、尙不満足、不完全の點多かつたこゝはいふまでもない。明治に入つて教育の勃興を來し、兒童に關する諸種の科學が發達するに及んで話術も必然その對象を二分しこゝに口演童話の發達を來したのである。

普通教育の發達ミ宗教教育の勃興ミは共に童話に新しい發展を齎した。童話は教材中の重要な位置を占めるミ共に宗教教育ミ童話ミの關係は次第に密接ミなり、お話を缺いての宗教教育は想像するこゝが出来ないまでになつた。宗

教教育上に於ける童話の効用は一般教育上のそれ以外に宗教心理的方面に重要性をもつ様になり、兒童の心を宗教的に統一してゆくことに重大な使命を存するのである。

童話本來の精神から云へば爐邊はなしの少しく發達した小會場童話が最も適切なもので、數百人の兒童を對象とする大會場童話は好ましいものではないが一般に大衆話術の傳統をもつわが國では、童話も必然的に大衆話術に向つて進展せざるを得なかつた。五百人、千人、時としては二千人の兒童を一定の場所に集めて慰安祝祭するための童話會、子供會等にて實演する所謂大會童話が盛んに行はれるに至つて話術にもそれに相應した特殊な研究が必要となつた。之等の大會に集る兒童は皆教育の程度が異り、年齢にも生活にも非常な差異があり十人十様である故に、お話は純化せる面白味に重きをおいて修身味とか、お話のあちを第二義とせねばならず、興味中心的な共鳴本位のものが實演せられた。明治末期より大正時代に於ける實演童話はジュエスチュアを大層大きく、話の筋には一層變化を多くし、誇張を用ひ、最も群衆心理を巧に利用した大衆型の童話がなされた。争闘もなく憐憎もなく兒童が無條件で實演價の豊かな童話の世界にひき入れられて純真無垢の雰圍氣に立つことは、兒童を現世淨土に遊ばせることであり魂までも淨化させるからで、之丈けでも人生にまつて實に尊いことで大會童話は全くこの點を狙つたものである。

さて大會童話として如何なる童話が取り扱はれたか淨土宗聯合兒童大會に於ける口演童話に就て述べんものである。先づ本兒童大會とは毎年六月夏安居に地方より來集する僧侶に佛教日曜教團による兒童教化の必要を説くために、大正六年新築成れる家政高女講堂に於て佛專兒童研究部の後援にて開催されたのを始めとし、第四回よりは主催者たる華頂山知恩院の集會堂へ移され、次いで昭和四年華頂會館落成するに及んで會場も近代美をほこる會館に變り現在に至つてゐる。斯くて本大會に於ける大會童話が兒童教化熱の勃興を促し、終に今日京都市に於て本宗のみにても三十有餘の日曜教團を數へ東西に兒童協會の設立、全國に亘りて數十名の兒童教化員を生むに至つた云つて

よい。

この大會は佛教寺院（知恩院）の主催で會場も始めは學校の講堂を用ひ、後には本堂（集會堂）を使用して五百人以上の兒童を收容して行はれたためにお話も自然興味本位の話であり、凡て群集心理を基とした大衆的の大會童話が實演せられた。而も會場は寺院の本堂（集會堂）であり、舞臺は床机を用ひ蠟燭を燈してその前で口演せねばならぬ故に話者も餘程の話術家でなければ成功は出来なかつた。この大會に於て巖谷小波氏、岸邊福雄氏、岩井監水氏等の大童話家が相當に長時間の童話口演にも拘らず滿場水をうつつた如くなさしめたのも、巧に群衆心理を利用して恰も一人の如き心理狀態とし、群衆の興味をそこにまで高潮せしめたもので眞に話術に妙を得たものと云ふべきである。

大正十五年頃より口演童話は狂言、兒童劇、童踊と共に實演せられ、模範的な兒童大會の形式を備ふるこゝとなり兒童の心理や疲労の程度が考へられて童話も一ステジ乃至二ステジになつた。大正十五年に大關尙之氏、昭和二年に天野雉彦氏が「あざみ姫」を、昭和三年には清水たかし氏が「ゴンザ虫」を實演したのを最後に大會の會場は華頂會館へ移されたが、これら諸氏のお話は講壇並に會場の不備のためにその話方に於て多くのジェスチュアを用ひ印象を鮮明にしなければならぬ故に話材の選擇に就いても年齢に應じた適當な話を選ぶことが出来ず、内容のやゝ複雑なお伽嘶、惡魔對治の話、多少の教訓を含む話が實演された。

昭和三年の秋、時代の要求に應じて華頂會館が落成したために、翌年より大會の會場はこゝに移り兒童二千を數へて盛大に催された。光線換氣の具合、壇の高さ、音聲の反響等を一新した會館に於ける模範童話は故巖谷小波氏によりて實演された。斯くて昭和五年より大會童話は新人によりて實演されるこゝとなり、加藤義孝氏が口演してより以後毎年新人に依りて佛教日曜教團に於ける在學三ヶ年間の童話研究の一端を發表するこゝとなり、最も自信あるお話を實演するこゝになつた。昭和六年には新人藤村秀洞氏が「スチアードの兄弟」を故巖谷小波氏が會館に於ける最後

の童話「初陣の話」ミこもに實演した。昭和七年には松本貞勝氏が「紫の百合」を、翌八年に於ては月澤信成氏が清水たかし氏と一緒に口演した。

次いで瀬戸教道氏が昭和九年に實話「小野先生」を口演し、昭和十年には阿頼耶順氏が「虎の子」を實演してゐる。この間に於て童話大會が淨土宗兒童協會の主催に依つて久留島武彦氏や清水たかし氏を講師として催されたミこ數回に及ぶが茲では省略して置くがこれらは單なる童話會であつた。

さてこの大會が華頂會館に移つてから會場の不備よりやうやく脱することが出來たが、開催の時期が初夏である上に、兒童劇や童踊がライトを使用し窓を閉め會場を暗黒にしたために兒童の疲勞を來し、口演童話の時間は二十分間程度のものミならざるを得なかつた。勿論會場は明るくし、換氣の具合も、音聲の反響に細心の注意をはらひ、童話をきいたために疲勞し心身を害せぬ様に注意されたが、年齢の程度が區々であり話をきく能力も相異してゐた故に話材に適當なるものを選ぶミが出來なかつた。このために話術に多くの研究がなされ、ジェスチュアのある、話の筋には一層變化のある、時にはクスグリを入れる必要があり、又群集心理を巧に利用して實演した。而もこの時代の童話が次第に教訓的内容を持つものが口演され、藤村氏の童話「スチワードの兄弟」の如く、三人の兄弟が自らの島をすくふ母國愛を畫いたものや、松本氏の如く、植物學者である年寄れる父のために藥草の百合をミりに行く冒險的な童話「紫の百合」、或は瀬戸氏の「小野先生」に於ける、川に溺れんミする教へ兒を救ふ師弟愛を主ミしたものと阿頼耶氏の「虎の子」が母の言ひつけを守らるべきミを説いたものなミその内容に於て教訓的宗教的色彩を帶びて來たミを物語つてゐる。

大正末期に於ける大會童話に於ても主催者が佛教寺院である故にその會の主旨に副ふた教訓的な話材が選ばれたミはいへ會場の不備のためなほ大衆型の童話が口演せられたが、この會館時代の話者は日曜教團或は寺院の本堂又は小

學校の講堂等の小會場に於ける口演童話を研究して來た、ものなる故に大會童話としての適當な話材を選ぶ必要があり、お話そのものが他所行きでなく身について來るまで、これを想像的集會に向つて試演し、幾回も試演しつゝ之を訂正し全く得心のゆくまでに完全なものとした後に始めて實演したが、これらの童話は依然としてデエスチュア中心のものであつた。然しながら「一にも準備、二にも準備、三にも準備」を、その用意周到なるべきことを忘れず、あくまで藝術的良心の上に立つて自信のある話を眞面目に全力を以つて實演した。

扱てこの大會が佛教寺院の主催にも拘らず佛典より取材した童話は未だ口演されず、又佛教精神を高謂した創作童話すら實演されなかつたことはこの大會に於ける童話として適當な佛教童話のなきことを物語つてゐる。この大會が昭和十年より勢至まつり兒童大會として、法然上人の御降誕をお祝ひする兒童大會となつた故に、今後はこの大會に於ける童話は誰の作品であつても、佛教童話としていゝものがあればそれを採つて實演すべきである。

明治時代より兒童文學が盛んになり童話の創作が激増した。世界童話大系、神話大系の刊行に刺戟されて佛教童話全集の出版、佛教實話集の刊行となり創作としての佛教童話は漸くその緒について來た。佛教の大精神は經典の中に攝つてゐてもこれを傳へるものなくば法の尊さは永遠に葬られるのである。自己の天職の偉大なることを自覺して佛の與へられた仕事を行はせて頂き、少しでも佛恩に報ひさせて頂くといふ心掛で立派な佛教童話の出現を望んでやまない。